

平成 22 年度 第 1 回富山県文化審議会

日時 平成 22 年 6 月 15 日（火）10:00～11:45

場所 富山県民会館 304 号室

議事 「新世紀とやま文化振興計画」の改定について

（会長） 本日は、『新世紀とやま文化振興計画』の改定について」を議題といたします。
富山県民文化条例第 8 条第 3 項および同条第 5 項の規定によりまして、知事から当審議会
へ諮問があります。

諮問文手交

（会長） 続きまして、事務局から『新世紀とやま文化振興計画』の改定について」並び
に「文化に関する県民アンケート（案）」について説明をお願いいたします。

<事務局説明>

（会長） ただ今、『新世紀とやま文化振興計画』の改定について」など、事務局から説
明がありましたが、文化振興計画の改定について、委員の皆さんからご意見を伺いたいと
思います。

委員の皆さま方は、それぞれの分野で活躍されている方々ばかりですが、文化振興計画
の改定に当たり、この計画において見直したら良いと思われる事項、あるいは新規の施策
や新たな方向について付け加える事項、さらには、今後、重点を置くべき施策等について、
ご自由に発言をしていただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

また、「文化に関する県民アンケート（案）」については、何か追加的な項目があれば、
ご発言の中でお願いしたいと思います。

（〇〇委員） 最近、私が各地に参りましていろいろと感じていることを申し上げます。

一つは、現在の文化政策の中で非常に重要な位置を占めてきている職人養成、あるいは
後継者養成事業の重要性です。今日、文化の振興という場合に、その後継者の育成が非常

に大きな問題となっており、最近、若者が従来とは違いまして、そういう職人技に対する挑戦を始める者が非常に増え、大きく時代が変わってきているように感じます。文化政策事業の一環としまして、職人教育事業もやっていただければ大変ありがたいです。

もう1点は、最近、各地において地域ブランド化戦略に持続的に取り組んでいることです。とりわけ産業行政が従来とは違いまして、文化行政との合体を進めております。経済産業省も最近大きく方針を転換しているかに見受けられます。それは文化資源の価値というものが、多くの場合、生活の中にあり、従来気が付かないもの、習慣や伝統の中にあるものが多くあります。有名なものでは、例えば徳島県の上勝町で、「つまもの」文化の再発見があります。これからのアンケート調査等の中に文化資源の発見と活用に関する項目を入れていただけたらありがたいです。

(〇〇委員) 以前、〇〇さんと呼んで東京でシンポジウムをした際、〇〇さんが述べたことの一つは、国のレベルにおいて、文化行政を文化庁が行っていただくだけではこれから先の文化行政は成り立たないということです。例えば観光の問題、あるいは産業の問題、教育の問題があるが、文化がこの富山県においても、3番目に連携という形でこの政策とのつながりが強調されている、国レベルでも内閣府がもう少し主導する形で省庁間の壁を打ち破るような施策を考え、その中で専門家組織が地域と連携しながら文化振興を考えていくことを想定して、動きたいということです。

2番目は、地域における文化施設を芸術拠点としてきちんと人材を確保していくということです。例えばそこが大学と同じように競争的資金を申請する形で、さまざまな企画を出し、審議されて、国が一部補助金を付けていくという考え方です。その中でのポイントの一つは教育との関連です。特に学校におけるコミュニケーション教育とのつながりということを重視すべきだということです。

続いて芸術家の雇用をきちんと図っていく必要があります。特に若い芸術家たちがなかなか仕事がなく途中で挫折していくような状況があり、これを何とか雇用という形で解決していきたいと彼は言っています。

これをどのような形で地域で集約して考えていくかがポイントなのではないかということで、私の意見に代えて報告しておきます。

(〇〇委員) 地域ボランティアの方々が地元の地域文化を発信しようと、だいが組織立

って動いているのは、県の指導が大変大きいのではないかと思います。

一方で、地域文化について、発見や活用という点ではまだまだかなと思います。地域の教育委員会の指定ではないが、砺波で一番最初にふるさと文化財という制度をつくりましたが、それぞれの市町村にそういったものがあるのもいいのかなと思います。実際市町村には、指定はされていなくてもいいものがたくさんあるはずだということで、少しずつ動きが出てきているというのも大変良いことです。

それと、職人教育について、以前、朝日町の手すき和紙の職人の方が、なかなか経済的に成り立たないとか、やめざるを得ないのではないかなという新聞の報道がありました。そういう若い方々が職人になろうという意気込みで私のもとにも全国から来ていますが、なかなか伝統的な工法など進むことが難しく、芸術文化の職人や、地元高岡の職人になろうとしても、受け入れ態勢がまだまだです。

それと、急激な開発で、大変素晴らしい景観がどんどん消えていっているのも事実です。早急な景観の保全が必要かなと思います。

地元では宿泊体験型学習といった、都市部から呼んで泊まっていただくという活動をしています。農業体験などに、1週間程度参加する開ヶ丘でスローライフフィールドというものも行われており、自分の手で作る喜びや楽しみを感じる方がたくさんいると思います。観光という点で、富山ならではの原風景の中における農業体験というのも一つの富山の魅力につながるのではないかなと思っています。

(〇〇委員) 近代美術館の魅力アップということで、最近、展示の工夫や、音声ガイドなどが充実し、親しみやすくなっており、うれしい思いです。もっと小さな子どもたちから若者、そして大人の皆さんにも親しんでいただけるような美術館づくりや、芸術の素晴らしさを子どもたちにもっと体験してほしいです。親子で一緒に美術館に行ったり、若い世代、中・高校生、大学生、若い社会人の方などの観覧はまだまだ少ない状態にもあります。

金沢の21世紀美術館や、しいのき迎賓館は、非常に素晴らしく、中に素敵なレストランがあり、そういう食文化という点からも美術館や博物館に親しむことができるのではないかなと思いました。ぜひ素敵なカフェかレストランを作り、近代美術館のイメージをもっと上げていく工夫ができたかなと思っています。その点、水墨美術館は、熟年の皆さまがたくさんお見えで、とても雰囲気安定しているのではないかなと思います。

もう一つは、世界遺産への登録を目指し、立山や高岡の話が出ていますが、私もユネスコ活動での「わたしの町のたからもの絵画展」のお手伝いをしておりまして、子どもたちが自分のふるさを見つめて、もっとその魅力を発見して絵に描こうということをしていきます。こういう運動はどんどん進められており、絵を通して、ふるさとの歴史や文化に多く親しめるような機会をつくっていきたいと思います。

今、ふるさと文学の作品の募集が始まり、これも大変素晴らしく、中高校生が、絵を描く機会が増えるといいと思っています。

(〇〇委員) 第1回とやま世界こども舞台芸術祭の開催というのは、非常に大きな成果であり、富山にいながら世界から集まる子どもたちと共に過ごす時間があり、見るだけではなく、富山の子どもたちが非常にたくさんの分野で参加できたということはすごくいい体験だったと思います。

また、指導者招へい事業では、いろいろな分野で指導者を招へいすることにより指導者のレベルアップにつながったり、子どもたちや若者など、いろいろな受講者の意識のレベルアップにつながるのではないかと思います。この事業はぜひ続けていっていただきたいです。

学校教育における文化活動の充実と地域文化の活動への理解や推進の中で、芸術文化アドバイザー事業がありますが、ぜひ、学校教育の中で良い指導者や、芸術家のアドバイザーの先生たちが指導するといいいのではないかと思います。

職人や芸術家の雇用については、舞踊の分野でも、高校生までは地元において活動はできますが、都会へ出て行って、それでまた戻ってきて富山で仕事としてやるのが難しいということが一つの大きな問題ではないかと思います。結局、わずかな若手が残り、その方がどんどん年を取っていくと、では次の若手の人といってもなかなか職業としてやれないというのが現状なので、何かいい方法がないかなと思います。

(〇〇委員) 文化を一言でいうと非常に幅の広いもので、集客施設を中心に計画するのは大変ではないかなという気がします。今、はやりの事業仕分けにおいても、公益法人に対しての事業仕分けをするとテレビで言っていましたが、本当に文化が仕分けに当てはまるのかどうかということです。発展的かつ速やかな事業でなければ仕分けをするという部分で文化を考えますと、非常に先行き不安なものを感じます。

富山県というのは文化の宝庫であり、その範囲が非常に広いので、演劇、文学、美術など何か焦点を一つに絞る必要もあるのではないかと感じました。

韓国や中国の躍進というのはすごくて、例えば文化政策の予算にしても、韓国、中国は日本の4~5倍の予算をかけています。最近の国際コンクールでは、ほとんど韓国が1位、2位を占めており、日本人は今まで元気でしたが、スポーツと同じように周りから侵食されつつあるのではないかという気がいたしますので、それぞれ専門の分野の方々の力を結集して、富山県がますます文化を通して素晴らしい県になることを心から祈っております。

(〇〇委員) この文化振興計画の中の他分野との連携について、一つは、里山・里海の生活文化というところが、富山県の文化性であり、大事ではないかと思えます。

先般も城端で民藝の全国大会があり、一番圧巻だったのは、夜の直会（なおりい）でした。赤御膳を220用意しました。地元の食材を使った料理をある方に頼んで出したところ、驚かれました。やはりこれだけの自然に守られた中の食材を生かした伝統的な料理です。

もう一つ、富山県というのは恐らく日本一の発酵食品の文化を持っていると思えます。発酵食品については、恐らく日本で1番だと思えます。これから文化的ないろいろな催しがあるとき食が一つの素晴らしい輪をつくると思えますので、この里山・里海のもたらす食文化を掘り起こすことが非常に楽しみになってきます。

(〇〇委員) 舞台芸術で一番素晴らしいのは、いろいろなジャンル、年齢層で、関心事もそれぞれであり、いろいろなお客さまが同じ時間に同じものを一緒に見て、同じ感動をする人もいれば、別々の感動をする人もいることです。それぞれの角度から感動したり、刺激を受けたり、不満に思ったりということが文化の起点になるのではないかと思えます。

どうしても何か物事を整理しようとする、縦割りに整理する、あるいは横一線で共通項を探すということがあると思うのですが、こういう基本計画を富山が他県に先んじているいろいろなことをなさっているという場合に、横断的なこと、あるいは相互連携的なことをもう少し膨らませていく必要があります。例えば、子どものための施策と高齢者のための施策を何故別々にしなければいけないのかという部分もあるかと思えます。もちろん特集的に別々にすべきこともあると思いますが、そういう視点が入ると素晴らしいのではないかなと思えます。

もう1点は、去年の利賀での演劇祭の際、来県された、韓国の文化体育観光部の柳長官

がおっしゃるには、文化というのは大体どの国でもちょっと外れにあるということでした。国の成長についてはそんなに大きな役割を持っていないと考えられがちだけれども、本当は文化がすべての基礎にあって、外交も政治も経済もすべて文化というものを頭にくっつけなければいけないのだということです。経済が駄目になったから文化をやるのではなく、経済も外交も文化があるから素晴らしいことができるという考え方に立たなければいけないと思いました。

(〇〇委員) 生け花をやっている方は高齢化していて、シニアの方々の話し合いの場的な感じになっております。これも悪くないですが、今、文化庁で伝統子ども文化教室というものが実施されております。花材費を無料にすれば人が来るので、子ども手当を皆さんに配るのでしたら、こういうお子さんの文化の方に回していただければいいのかなと思います。

(〇〇委員) 県民と文化ということでどう関係付けるかについて、いろいろな問題があります。

文化に関しては、無関心がけしからんということではなくて、そういう方々が文化から疎遠ということを断ち切るような方法がなかったのかと思います。

特に今、改定ということで、現代技術文明がどしどし発展してきている中で人は文化とどうかかわり合うべきか、われわれの住んでいるコミュニティをどうするかという話にもなってくるわけです。

私は、文化の鑑賞のチャンスを増やすということは当然のことだと思いますが、文化の素養を磨くという視点を確たるものにしておきたいです。高度技術文明社会の技術と文化が、何かお互いに反目し合っているような気がしてならないのです。デザインを生かした新商品の開発もありますが、そこは連携の取り方だと思います。

それと、子どもについていろいろな素養を磨かせるということになりますと、子ども教育は当然のことなのですが、やはり大人が変わらなければいけないです。私は遊びということがとても大事だと思います。文化芸術というところの一步前に、大人と子どもが一緒になって遊ぶような、遊びから学び、学びから文化へという、そういう発展的なことをもっと考えていかなければいけないだろうと思います。アートミュージアムなどへ行って何かをするというのではなく、結局は各家庭で恒常的に素養を磨かなければいけないのだら

うということになります。

それと、地域の問題としては、どこの町にもやはり文化の香りがするような拠点があればいいなど。地域でコミュニケーションの場みたいな、文化的な価値がなくても、そこにみんなが寄り集まれば文化性が出てくるといった視点と連携の基本というものをまず思った次第です。

(〇〇委員) NHKの「オトナの試験」という番組のように、富山県で職の技能を紹介する番組を流せば、ああこういう道に進んでみたいかなと思う若者の指針になるのかなと思います。

ふるさと文学館については、ボランティアを募るときに、何を発信したいかということ をきちんと考えて応募するような仕組みであったらいいなと思います。何かいろいろと発信したいものを持っている人はいると思うので、ふるさと文学館において、提案を掘り起こし、それを育てていくことがあったらいいなと思いました。

また、内山邸の建築が修復されていますが、内山邸は本当に文学の大きな教養を保持しているところですので、その文学というものを少しずつ県民に発信できたらいいなという要望を思いました。

(〇〇委員) 外から見ると富山はすごいことをやっているなというのをあらためて感じる事が最近よくあります。これもやはり富山県知事さんはじめ、県の文化行政にかかわる方が熱心にやってくださっているおかげかなと思っております。

県民芸術文化祭を毎年やっておりまして、県内4カ所で持ち回りで4年に1回、富山、高岡、新川、砺波と回っていますが、こんないい公演があるのを知っていたらもっと前からやりたかったという意見や、地元の文化団体とのかかわりをもっと深くする必要があるという意見がありました。それは単なる県単位での文化のお祭りで終わらずに、やはり質の高さを求めて毎回やってきたという点にあるのかなと感じております。

それと、県民ふれあい公演という事業があります。芸術家が各地域の学校や、公民館、各ホールに出向き公演をするといったものです。芸術文化を鑑賞することができない方のために、音楽や演劇や舞踊などに触れていただくというこの県民ふれあい公演は、毎回喜ばれ、反応があり、生の舞台を味わっていただけるということで、非常にいい事業だと思っております。

とやま世界こども舞台芸術祭についてですが、富山にいながらにして世界の舞台芸術に触れ合うことができます。同時に、子どもに特化した見方でいうと、政治などのかかわりなしに、純粹に芸術文化によって触れ合うという姿を見ていて、やはり世の中は平和でないこういったシーンが見られないのだなということを何度も痛感しました。子どもに特化した部分と、子どもと大人、さらには高齢者の三世代が同時に楽しめ、一方、同じものを見てそれぞれが違った見方をするのも大事なのではないかと思います。

また、文化ボランティアについて子どもの芸術活動を支援するという支援協議会という団体が、世界こども演劇祭時からあります。これは母親の視点で子どもたちの芸術文化を支えようというのが原点にありまして、今後の富山の芸術文化を支えるために非常に大きな活動だと思います。

もう1点、舞台サポーターという名称で、最近、劇場の裏方を手伝ってくれる方がいます。最近、興味本位でボランティアに参加されて、何か物見遊山なように見受けられるのです。この文化ボランティア活動について、意識を持って参加するという条件を付けて進めていけばいいのかなと思います。

(〇〇委員) 文化振興については、より多くの県民の方が文化に親しんだり、理解したりする土壌を耕す活動なのかなと見ております。そういう意味では、文化を振興していくための人づくりについて、具体的にたくさんあるといいなと思います。

当然、短歌や舞台芸術にしても生に触れるのに勝るものは絶対ないと思うのですが、富山県内でも、交通手段のなかなか取れない高齢者や子どもにはたくさん文化活動をしてほしいのですが、何かに親しんだり、広めたりする土壌を深めるという意味では、文化の環境格差を埋めるための何か方法が工夫されていくといいなと思っております。例えば IT 技術を活用していくなど、生に勝るものはないけれども、生のを補完するものを充実していただけたらいいなと思います。

それと、参加を促す取り組みや発信などもこれからは非常に大事になってくると思っています。

もう1点、アンケートについて、有効に活用されて、答える人も答えやすく、活用しやすいアンケートにしていいただければと思います。

(〇〇委員) ようやく食に関しては富山の時代が来たなと思っております。食にもトレ

ンドがありまして、バブルのころは飽食の時代で、そのころは富山の料理は非常に評価が低かったわけですが、近ごろでは心や体にいい料理が求められ、素材を含めて富山の料理は大変評価され始めたと思っております。大変いい時代になってきたなど実感しているわけです。

世の中全体が素材主義ということもあり、メジャーなもので、ホタルイカ、シロエビ、いろいろなものが評価されているわけですが、基本的には富山の料理というのは、浄土真宗の仏の教えを守った料理がコンセプトでありますから、材料を無駄にしない、もったいない精神が息づいています。現代的に言えば、エコにもつながっておりますし、シンプルな生活にもつながって、しかもそれが体にいいという料理が随所にあるわけです。代表的な料理のよごし、ブリ大根にしましても、今では単に富山の郷土料理ではなく、日本料理に昇格したような感じもあります。そういうもので、もう一度見直すということも大事なのではないかと思っております。

また、現代においておいしさは、情報の量だとも思っておりますし、ブランドをつくるのも情報の量だと思えます。もちろん行政でもマスメディアを使っていろいろとやっておりますが、やはり県民が富山の食材、料理の良さを学んで、知ることによって、県民の皆さん一人一人が発信し、富山の食文化の向上につながっていくのではないかと思っております。

(〇〇委員) 三つほど述べさせていただきたいと思えます。

1 点目は、やはり子どもたちに伝統文化や文化振興の取り組みに参加してほしいという思いはあります。学校教育の中でも、表現活動やコミュニケーションといった教育内容がたくさん盛り込まれていまして、そういう意味では文化振興と何らかの形でかかわれる活動が学校教育の中に期待できます。しかしながら、現実を考えると、先生方そのものが実はあまりゆとりがないです。先生方は、本当に自分から、文化の楽しみ方ということにある意味親しんでいないので、なかなかうまく学校教育の中でできないということがあります。何でこんなにぎすぎすしたゆとりのない社会になっているのかなと、その辺を少し改革できないかと思えます。

2 点目は、学校教育だけでは難しいので、地域のボランティア等社会教育との連携がどうしても必要だと感じます。そういう意味では、文化振興を担うコーディネーター的役割を担う人材をうまく使っていく仕組みがやはり必要なのではないかと思えます。そういう

意味では文化振興というものが学校教育と社会教育をうまくつないでいけば、富山にはもともとネタはいっぱいあるわけで、それが学校教育の中に生かされるのではないかと思います。

実は、3年来、「子どものための手仕事図鑑」というものを私が中心に作らせていただきました。これは伝統文化を引き継ぐ方々が、頑張って伝統を受け継いでいるのだということ子どもたちに伝えたいと思い、ネット上の教材として勉強できるものを作りました。富山にはその素材が100近くもあるということを私自身が知りました。こういう活動をするのも大変学校教育の中では難しく、そういう意味では学校の先生にゆとりを持たせるということと、コーディネーター的役割を担う人をうまくつくっていくことが文化振興につながると考えています。

3点目は、インターネット等情報通信技術による発信がもっとあってもいいのではないかと思います。特に世界への発信でもって世界から人が呼び込めるものです。同時に地域への発信についてもまだまだではないかなと思います。やはり地域へ発信することで興味、関心を持つ人を増やせるし、その人たちがボランティア的、コーディネーター的役割を担う次の人材になり得ます。もっといい仕事を発信できる仕組みを作る必要があるのではないかと思います。

(〇〇委員) この文化振興計画の表(資料1-1)を見ますと、左から矢印があって右へ右へと進んでいってます。こういう方向性で、こういう重点施策で、この事業展開だなということなのですが、例えばこれを逆に、この事業展開には何がかかわっているのかなというという表があってもいいと思います。そうするとそれぞれが単独ではなく、むしろこの重点政策が縦に結び付くようなものが見えてくるのではないかなという気がしました。

教育というのは、その縦結びが意外とうまく結び付けられる場所であるのではないかなと思っています。ボランティアの話も地域との結び付きもそうだと思います。ボランティアでいえば、平高校の郷土芸能というのは、実に地域の皆さんのボランティアのおかげで全国のトップを維持しているところです。こういうシステム化というか、制度化していくといいのではないかなと思います。

また、スポーツと芸術文化は対極にあるようによく言われてますが、スポーツにはスポーツエキスパート制度といって、高校に年間を通して日常的に専門家が入るというものがあります。これが文化の方では、芸術文化アドバイザー制度があり、スポーツエキスパー

トと同等の制度になって、文化エキスパートという制度になっていくと、ボランティアや地域の皆さんの力をもっと有効に活用できるのではないかと思います。

(〇〇委員) 文化というのは、本当に生活の中に自然に入り込んでいて、自然に導くものかなと思っているのですが、実際、特に親世代や子ども世代に関しては、文化に触れることはいいことだが、別に触れていなくても差し支えないという感じで、割と二の次になってしまっている傾向があると感じております。

ただ、文化をこれから担っていくのは子どもたちなので、やはりその子どもたちがいかに文化に触れるかということがとても大事だと思います。待っていても、子どもたちも親世代もなかなか食いついてこないのが現状で、やはり子どもたちの中に飛び込んでいかないといけないのではないかと思います。

本当は学校教育に入り込むのが一番いいのですが、やはり先生方もお忙しいということがありますし、また、いろいろなカリキュラムがあっても、なかなかそこまでは難しいのかもしれないのですがやってみれば楽しいものです。ただ、その取り掛かりがなかなか見つからないということで、指導者がその地域のクラブ活動の中に入っていき形で取り組むことができたという話も聞いております。あと、子どもが減ると、いろいろな地域のお祭りなども、それを伝承していくということがなくなり、結局学校にお願いをすることになります。やはり学校を巻き込んでやらないとなかなかその地域に根付いている踊りなどを伝承していけない時代なので、そういった意味では、先生に負担を掛けないようにしながら、地域の方々をうまく活用して、学校の中で伝承していかなくてはいけないと思っております。

加えてPRというのはすごく大切だなと思います。例えばついこの間まで、堀田善衛さんというのをテレビでもよく宣伝していましたが、自然に耳に入り、これは見にいかなくてはという形になるので、そういったPR方法も必要なのかなと思いました。

(〇〇委員) 4点に絞ってお話します。

まずボランティア人材を活用するシステムづくりです。ボランティア人材の活用がスムーズにできるシステムをつくるかが一番大きな問題だろうと思います。

それと、高齢者プラス若者ということも必要なもので、その両方を見据えた上でのボランティア人材というもののシステムづくりが重要です。

2 点目は、県民の方々にこれまでの富山県、あるいは県芸術文化協会、あるいはその他のいろいろな方々がやってこられた取り組みや歴史を何とか知ってもらうシステムはないのかなと思うのです。

3 点目は、言語というか、言葉の教育なのですが、先日、ハンガリーの、ラーツ県知事に、「ぜひハンガリー語を勉強してもらいたい」と言われました。そういう交換留学生への支援といいますか、こっちが向こうへ行くならば、向こうがこっちへ来て日本語を学ぶ支援といったものが、あってもいいかなと思います。そういう交換留学生のシステム化というものが実現すればとてもいいなと思いました。これはいわゆる英語とか、フランス語とかではなくて、ハンガリーといったようなあまり人が知らない言語の教育のシステム化に向かえばいいかなと感じました。

最後は、料理への取り組みにおけるシステム化です。聞くところによると、東京のさる有名なレストランが、氷見の食材を求めて氷見に開店するという話も聞いています。他に負けない富山県のオンリーワンみたいなものをぜひ応援したいと思っております。

(〇〇委員) 東京で、シモン・ゴールドベルクの音楽祭のセミナー受講生の選考会をやってきました。先生方、生徒方に評判が良くて、だんだん生徒が増えてきているものの、受け入れられる生徒数は限られているので、この後どうしていけばいいかなというのが一つの問題です。

2 点目は、近代美術館についてですが、友の会の会員の募集規模が 300 人となっておりますが、0 が一つ、二つ違うのではないかなと感じました。もっと近代美術館なら友の会の方がたくさんおられていいのではないかと思います。やはりたくさんの人に知っていただければ、そこから広がりますし、多くの人が見に来ていただけるという意味ではもう少し何かしないとと思っています。

それと、子どもの芸術文化の教育、素養ということで、最近、欧米でも創造性・革新的な考えをはぐくむという意味で芸術文化は学校の教育で大事なものだということが見直されてきています。そういう意味では、富山県で月に 1 回ぐらいプロの職人の方々が学校に行って子どもたちに芸術文化を伝えるということが非常に大事なのではないかなと感じました。教える方にとっても、すごく勉強になるのではないかなという気がします。ぜひこのあたり何か富山県として素晴らしいものができればと思います。

(会長) ありがとうございます。

私の意見としてただ一つ付け加えるとすると、私は直接、芸術文化にかかわっていないのですが、私は仕事でもかなり今クリエイティブで、物や技術を開発するなどの仕事においても、非常に多くの接点があり、同じような意味だと思っています。

とにかく質を追求していきたいです。生活の質を追求していきたいです。品物の質もですが、行動の質、考え方の質、全て質を追求していきたいということを全世代が総力でやっていないとなかなか大変だなと思っています。